第五十四回中央教化研究会議
総評

蓑輪顕量

皆さんの活発な意見交換を聞かせていただきました。全ての分散会を聞こうかと思っていたのですが、白熱している分散会に少し時間をかけすぎてしまったこともあり、聞きそびれてしまった分散会もございました。本日のご講演を聞いて感じたところは、ＳＤＧｓとは、現代社会が避けては通れない今まさに直面している問題で、それを意識化しようという運動だということです。

大学でも、ＳＤＧｓの問題は数年前から強調されるようになり、私たちの社会といいますか、この世界が成り立つかどうか、継続して次の時代に伝えていけるのかどうか、非常に危険な状況まで来ているのだと思います。それに対して、私たちがどう自覚しそれを改善していくのかが問われている状況であると考えます。これは、世俗の人も世俗ではない私たち「出家者」も、誰であっても避けることのできないところまで来ており、それについて考えていかなければいけません。

実際に、仏教者はお釈迦さまが出家した動機をきちんと考えていくべきだということで、チベットの仏教者の間から起きている運動（シッダールタ・インテント）を何度か紹介したことがあると思います。人々が抱えている悩みや苦しみに正面から向き合って、その解決の道筋を示していく、あるいは一緒になって模索していくことが宗教者の役

割であり、仏教者の役割だと考えます。この問題は、身近なところで感じられる部分をそれぞれが改善していくしかないのではないかと思います。

現代社会が抱えている問題の一つとして大きくクローズアップされているのがジェンダー問題です。本日の発表の中で、この問題が殆ど解決されていない国は日本と韓国であると報告され、その原因の一つが文化的な価値観であるというのは、確かに背景に存在しているものだと思います。しかし、これは現実に変えることが可能であると思います。恐らく、背景に存在している一番の要因は儒教であると思うのですが、その大もとであった中国は、共産革命を経て曲がりなりにも男女平等社会を作り上げ、大きく価値観が変革しました。それを前提に考えると、日本や韓国も、ジェンダー問題に対してもう少し意識化してもいいのではないでしょうか。

ある分散会で議論されていたことですが、「無意識のバイアス」という言い方が使われていました。私たちが意識していないところで起きている偏見・差別みたいなものが存在しており、それは、私たちが文化的な影響を受けながら成長していく過程で、いつの間にか身についてしまったなじみというのでしょうか、なずみというのでしょうか、そういうものだと思うのです。私たちの心が何か物を認識していくときに一番根源で働いているものを、仏教者たちはサンスカーラ「行」という名前をつけ、それを意識化したのだと思います。それが実は大きな問題を起こしているというのが、仏教が見つけ出した、お釈迦さまが意識した大事な点だったのではないでしょうか。つまり、私たちが無意識の偏見に縛られていることが多いということを自覚することができれば、それが第一歩になるのではないかという気がいたします。

議論の中では、本日ご講演いただいた西永先生の坊守さんの話について、いろんな分散会で盛り上がっていました。この問題は、日本の仏教界が僧伽でお寺を経営していくという伝統的なあり方を、ある時点でなくしてしまったことが、一番の原因なのではないかという気がいたします。戦前までは、地方のお寺に行っても、大体四～五人のお坊さ

んがいたと言われます。いわゆる現前僧伽を構成していて、次の世代のお坊さん、小さい子も含めて四～五人の方がお寺にはいたという話をいろんな方に聞きます。

これが家族化していったのが、戦後の日本における仏教の存在形態の大きな変化だと思うのですが、本来お寺とは、現前僧伽ですから、四～五人のお坊さんは最低でもいて、さまざまな運営ができていたはずです。これが家族でやらざるをえない方向に変わってきてしまったことで、必然的に生じている問題なのではないかという気がいたします。としたら、いかにしてお寺に関わってきてくださる人たちを、お寺のさまざまな運営等に関わっていただいて一緒にやっていくのか。その中で、仏教的な物の見方をいかに身につけていただくかというのを、考えていけばよいのではないかという気がいたしました。

実は、面白いなと思いながら聞いていたのですが、キリスト教のプロテスタントの方たちは、牧師さんといって結婚することが許されております。カトリックの場合は、大体神父さんで結婚することが許されておりません。プロテスタントの方たちで結婚している牧師さんの奥様が、実際に教会の運営に関わっているかどうか、例を聞かせてもらったのですが、全く関わっていない人たちが結構いるようです。これはある意味で、宗教が、世俗の職業の一つのように認識されてきていることを表しているのではないかという気がいたします。

つまり、今の寺院の家族化が進むということは、ある意味で出家という形ではなくて、在家の形で何かを伝えていこうという方向にシフトしているのだと思います。既にある程度先行しているプロテスタントの中でもそのあたりは割り切っているようで、協力する奥様もいれば、協力しないで別の仕事をしている人たちもいる。これは、一方で、宗教的活動が世俗的な職業と同じと認識され始めていると捉えることができるのではないでしょうか。

今、日本社会では、サラリーマンとして働いている男女が一緒になった場合、そのままそれぞれの仕事を続けることが認められてきているような気がいたしますが、宗教活動も同じような次元で受け止めていいのでしょうか。これ

は、もう一度考え直さなければいけないのではという気がいたしました。実際にお寺の関係者に嫁ぐ女性の立場になって考えれば、宗教活動に協力していくという立場で入ったのか、あるいは、自分の職業は職業として、普通のサラリーマンと同じようにお寺のお坊さんを考えて旦那さんに選んだのか。このあたりのことを問われるのではないかという気がいたしました。

それから、寺院の中のいろいろな役職というのは、古代から存在していたことが資料の上にも伝えられていまして、中国律宗の道宣が書いた『四分律行事鈔』という資料の中に出てくるのですが、僧侶の人たちにも何種類かあるようです。それから、お寺のいろんな仕事を助ける役割の人は佐利衆事と呼ばれ、多くのことを助ける人という意味で使われています。この人たちが、お寺の様々な場面において補完的な役割を果たし、お寺が運営されていました。

現代でも、実際お寺は法事だけではなく様々な仕事がありますので、補佐役になってくれる人の有無で随分変わってくると思います。逆に、いまは家族というのを前提にして考えますが、独身のお坊さんで、一人で運営せざるをえないお寺も多数あると伺いますが、各々が様々なことを工夫してやっていると思います。例えば、在家の信者さんの中で友の会みたいなものを作り、行事を含め様々な場面で支えてもらうなど、そういうことも考えていく必要があるのではないかと感じます。

最後にジェンダー問題ですが、元に立ち返れば同じ人間であると考えるのがいいのではないでしょうか。無意識の偏見を超えていくときに、どんな考え方が望ましいのかということを考えなければいけません。マハトマ・ガンジーのひ孫に当たる方が面白い方で、クルカルニ・ガンジーという方なのですが、曾祖父が行った塩の行進をもう一度真似し、なぜ広大なインドが一つの国として存在しうるのかをこの目で確かめてみたいという理由で、南のカニャクマリから北のレーまで目指して歩くということを始めたそうです。この方が踏破を成し遂げたあとに言われたことが大変に面白く、非常に単純なことですが、「実はみんな同じ人間なのだというのを実感した。文化は違うし、民族も違

うけれども、私たちはみんな同じヒューマン・ビーイングズなのだ。その起点に立ち返って物事を考えていく必要があるのではないか」と述べていました。これは、仏教者として大事な点ではないでしょうか。全ての人が仏性を持った同じ存在なのだと考えるところから、私たちの偏見を超えていくことが可能になるのではないかと考えております。

今日のお話を聞いていて、浄土真宗さんの抱えている問題、地域性ということも大きいのかもしれませんが、現代の日本の仏教界、恐らく全部の宗派に共通する問題なのではないかと思いました。長くなってしまいましたが、コメントとさせていただきます。ありがとうございました。